

## 19世紀のフサイン朝チュニジアにおける危機と改革(1) — アフマド・ベイの統治と対外関係

桃井 治郎

### 要旨

19世紀のフサイン朝チュニジアは、フランスとオスマン帝国本国からの圧力にさらされ、存亡の危機に瀕していた。1837年、フサイン朝の君主として即位したアフマド・ベイは、対外的な危機に対処するため、改革に着手する。

アフマドの改革で特に力点が置かれたのが軍事部門である。アフマドは、西洋式軍隊のニザーミ軍を拡充し、西洋式教育を行うバルドー士官学校を開設した。従来の軍務はトルコ系住民やマムルークが担っていたが、ニザーミ軍では新たに地元アラブ人が徴兵された。また、ベイの宮廷では、従来のマムルーク官僚に加え、地元のアラブ人有力者も側近として名を連ねた。

産業分野では、武器工場や軍服製造用の縫製工場などがフランス人技術者の援助で建設された。また、イタリア人建築家による西洋風の大宮殿の建設も行われた。

増大する支出を穴埋めするため、租税制度の改革が実施され、新たな農産物への課税や租税取り立て請け負い制度などが導入された。さらに、地方首長カイドの地位を地元アラブ人の世襲ではなく、ベイが直接任命するなど宮廷による地方支配が強化された。

外交分野では、アフマドはオスマン帝国からの圧力に対処するため、ヨーロッパに接近する。1841年にはイギリス領事の求めに応じて奴隷制の廃絶を宣言し、1847年にはフランスへの訪問を実現する。アフマドの外交の目的は、フサイン朝チュニジアをオスマン帝国の一領土ではなく、独立した主権国家として確立することであった。

1850年代に入ると、増大する財政支出や側近による横領事件などにより、深刻な財政危機に陥る。アフマドが進めた改革は中断された。1855年、アフマドは病気で息を引き取る。

アフマドの改革による直接的な成果は乏しい。ただし、その改革は、次の時代に、バルドー士官学校で西洋式教育を受けた改革派官僚を生み出し、徴兵制度や租税制度の改革によって「国民意識」の形成に寄与するなど、チュニジアにおける変革の土台を築いたという点に意義を見出すことができる。

### Crisis and Reform in Tunisia in the 19th century (1): Ahmad Bey's Rule and Foreign Relations

Jiro MOMOI

#### Abstract

In the 19th century, the Husaynid dynasty of Tunisia was endangered by the pressure from France and the Ottoman Empire. Ahmed Bey who succeeded to the throne of the Husaynid dynasty in 1837, initiated reforms to address the external crisis.

The military sector was a particular focus of Ahmad's reforms. Ahmad reinforced the Nizami Army, a Western-style army, and opened the Bardo Military School which provided Western-style education. Although the traditional military service had been implemented by Turkish residents and Mamluks, the Nizami army recruited local Arabs. In addition to the traditional Mamluk bureaucrats, influential local Arabs served as vassals at the court of Bey.

In the industrial field, military sector factories and a textile factory aimed at producing the Nizami Army's uniforms were built with the help of French engineers. A Western-style grand palace was also built by an Italian architect.

To compensate for the increasing expenditures, new taxation on agricultural products and a new tax collection system were introduced. Furthermore, the court's control over the provinces was strengthened, with the Bey directly appointing the position of Qaid (local chief) instead of a hereditary succession by the local Arabs.

In the diplomatic field, Ahmad approached Europe to address pressure from the Ottoman Empire. In 1841, he declared the abolition of slavery at the request of the British Consul, and in 1847 he made a visit to France. His diplomatic aim was to establish Tunisia as an independent sovereign state, rather than as a territory of the Ottoman Empire.

In the 1850s, the dynasty faced a serious financial crisis due to increased fiscal spending and embezzlement by his aide. Ahmad's reforms were suspended. In 1855, he died of illness.

The direct results of Ahmad's reforms were scarce. However, the reforms were significant in that they laid the groundwork for change in Tunisia. They produced reformist bureaucrats who had received Western-style education at the Bardo Military School, and contributed to the formation of "national consciousness" through reforms in the conscription and taxation systems.

## はじめに

19世紀のフサイン朝チュニジアは、対外的な圧力の下で存亡の危機にさらされていた。近隣地域を見ると、西隣のアルジェリアでは1830年にフランス軍による侵攻が始まり、東隣のトリポリ地域では1835年にカラマンリー朝が廃され、オスマン帝国本国による直接統治に移行していた。チュニジアは、西からはフランス、東からはオスマン帝国という二つの脅威にさらされていたのである。

こうした状況の下、1837年、第10代フサイン朝君主としてアフマド・ベイが即位する。

なお、のちに見る通り、フサイン朝チュニジアは、オスマン帝国の属領という性質と同時に、ベイと呼ばれる君主がオスマン帝国からは独立して統治する領地という性質も帯びていた。すなわち、この時代のチュニジアは、オスマン帝国チュニス州であると同時に、独立した政体としてのチュニス・ベイ領でもあったのである<sup>(1)</sup>。この政治的な二重性は、

19世紀のチュニジアの歩みに大きな影響を与える。

本稿では、19世紀に至るフサイン朝チュニジアの歴史を概観したのち、アフマド・ベイの統治期(1837-55年)における諸政策や対外関係について見ていく。あらかじめいえば、アフマド・ベイが行った政治・経済・軍事面における改革は、対外的な危機に対する反応であった。ただし、その改革は結果的には不完全なものとして終わる。本稿では、当時のチュニジアが置かれた国際的な状況に留意しながら、アフマド・ベイの改革の意義や限界について検討していきたい<sup>(2)</sup>。

## 1. フサイン朝チュニジアの歩み

チュニジア地域がオスマン帝国の領土となったのは、16世紀である。当時の地中海はオスマン帝国とスペインが覇権を争っており、北アフリカもその対立の舞台となっていた。

1492年のレコンキスタの完成後、イベリア半島を追われたイスラーム教徒の多くが北アフリカに移り住む。そして彼らの中からスペインへの復讐心を持ち、スペインの沿岸地域や船舶を襲う海賊が現れた。これに対し、スペインは北アフリカに艦隊を派遣し、アルジェやオラン、ベジャイアなど海賊の根拠地となっていた主要港を攻撃して海賊を鎮圧する。

その後に現れたのが、東地中海からの海賊たちであった。特に有名なのがエーゲ海レスボス島出身のウルージュとハイルッディーン兄弟である。彼らはハフス朝支配下のチュニスに拠点を移し、西地中海で海賊行為を繰り返す。さらに、1516年にはアルジェを征服し、ウルージュはアルジェの支配者となった。

繰り返される海賊行為に対し、スペインは再び北アフリカに派兵し、1518年、アルジェリア西部のトレムセンに滞在していたウルージュを打ち倒す。一方、アルジェで留守を預かっていたハイルッディーンは、スペインの脅威に対抗するため、オスマン帝国のセリム2世に援軍を要請する。セリム2世はアルジェに援軍を送るとともに、ハイルッディーンをアルジェ総督に任命する。以後、アルジェリア地域はオスマン帝国の属領となった。

1534年、ハイルッディーンは、ハフス朝チュニスにおける宮廷の内紛に乗じてチュニスを征服する。ハフス朝の君主ハサンは、チュニスを追われた後、スペインに援助を求め、オスマン帝国の西地中海への進出に懸念を抱いていたスペインは、ハサンの求めに応じ、翌年、スペイン王で神聖ローマ皇帝でもあったカール5世自ら大軍を率いてチュニスに遠征する。

結果的にチュニスはスペインの力でハフス朝の統治に戻ったが、1565年、今度はオスマン帝国軍がチュニスを攻略し、1574年にはオスマン帝国の現地総督パシャがチュニスに派遣されてチュニジア地域もオスマン帝国の属領となった。なお、東隣のトリポリ地域も、1551年にオスマン帝国に編入されていた<sup>(3)</sup>。

ただし、アルジェリア、チュニジア、トリポリ地域はオスマン帝国の属領となったとはいえ、地理的に本国から離れていることもあり、実質的にはそれぞれが自立的な統治を進めた。当初はオスマン帝国から派遣されたパシャが統治者として君臨したが、17世紀以降、アルジェでは軍事長官であるデイが、チュニスやトリポリでは行政官であるベイが実質的な統治を担うようになる。チュニスでは、1705年にフサイン1世が権力を奪取してベイの地位につき、以後、フサイン家がベイの地位を世襲していく。いわゆるフサイン朝の時代である。なお、アルジェではデイの地位は世襲ではなく、イエニチェリやライースなどの軍人によって継承されたが、トリポリではチュニスと同じくベイの地位が世襲され、カラマンリー朝と呼ばれる。こうして、アルジェリアやチュニジア、トリポリ地域は、実質的にオスマン帝国から独立した政治体制を形成するのである。

外交的に見ると、この地域は16世紀にはヨーロッパ諸国との争いが絶えなかったが、17世紀以降、両者の関係は安定していく。スペインと対抗関係にあったフランスやイギリス、オランダがオスマン帝国とカピチュレーションを結んだこともあり、17世紀には、アルジェやチュニス、トリポリも3か国とそれぞれ和平条約を締結し、さらに18世紀にはスペインを含めた他のヨーロッパ諸国とも条約を締結する<sup>(4)</sup>。なお、上述した通り、この地域はオスマン帝国の属領とはいえ、本国とは別にヨーロッパ諸国とそれぞれ外交関係を樹立し、条約を締結していた。

ただし、19世紀に入ると、従来の外交関係に変化が生じる。ナポレオン戦争後のウィーン体制の下、ヨーロッパの大国が北アフリカ海賊問題で協調し、海賊の廃絶決議を行うのである。1819年には、英仏艦隊がアルジェやチュニスに来航し、軍事的な圧力の下で海賊の廃絶を要求する<sup>(5)</sup>。これ以後、北アフリカの海賊行為は停止した。

その後、チュニスに残るわずかな艦船は、スルタンの要請に応じてギリシア独立戦争に派遣されたが、1827年のナヴァリノの海戦で壊滅した<sup>(6)</sup>。なお、同年はアルジェのデイがフランス領事を扇で叩いたとする「扇の一打」事件が起き、アルジェリアとフランスとの関係が決定的に悪化した年である。そして、1830年、フランス軍によるアルジェ侵攻が始まる。

## 2. 19世紀前半の国際状況

1830年6月14日、フランス軍がアルジェ近郊に上陸する。フランス国内では、シャルル10世の復古王政に対する不満が高まっており、アルジェ侵攻はいわばそのはけ口でもあった。フランス国内では、翌月に革命によって復古王政が倒れ、ルイ・フィリップによる立憲君主制が始まるが、新たに誕生した7月王政下でもアルジェリアの征服は継承された。

アルジェに上陸したフランス軍は、圧倒的な軍事力で瞬く間にアルジェを包囲する。7

月5日、アルジェのフサイン・ベイは降伏し、アルジェを明け渡した。この後フランス軍はさらに周辺地域に進軍していく。

チュニスのフサイン2世・ベイ（在位：1824-35年）は、アルジェに侵攻したフランス軍に対し、求めに応じて食料を供給するなど協力的な姿勢をとった<sup>(7)</sup>。アルジェとチュニスの関係が従来から良好ではなかったこともあるが、なによりもフランスの軍事的脅威を前にフランスに敵対するという選択肢は失われていたのである。

それを証明するように、フランス軍によるアルジェ占領翌月の1830年8月、チュニスのベイはフランスとの間で条約を締結する。

1830年条約の概略を記すと、第1項は海賊行為の禁止、第2項はキリスト教徒奴隷の廃止、第3項は海上救難活動の取り決め、第4項はヨーロッパ諸国による領事館や商社の自由設置権ならびにヨーロッパ諸国への貢納要求の禁止、第5項がフランスへの珊瑚漁独占権の付与、第6項が外国商人による商業活動の自由ならびにベイによる流通独占の禁止、第7項はフランスへのカピチュレーション付与の再確認、第8項が同条約のチュニジア内への周知である<sup>(8)</sup>。

1830年条約では、海賊行為の禁止やキリスト教徒奴隷の廃止のほか、商業活動の権利やカピチュレーションに基づく領事裁判権の確認など、チュニジアにおけるフランスの商業活動を促進する内容が含まれている。フランスの歴史家ダニエル・パンザックは、同条約について、「海軍力によってヨーロッパ列強がアフリカ・アジア諸国に課した19世紀最初の不平等条約」<sup>(9)</sup>であったと指摘している。

アルジェリアではフランス軍による侵攻が続いていた。1831年9月、アルジェリアの西部地域を治めるオランのベイ<sup>(10)</sup>がフランスに降伏するが、地元の盟主で宗教指導者でもあったアブデルカーデルがフランス軍に対するジハードを宣言し、1832年11月に抵抗活動を開始した。

1834年7月、フランスはアルジェリアを併合することを決定し、事実上の軍政が始まる。1962年まで続く植民地支配の第一歩である。

一方、この時期、トリポリ地域でも大きな政治的変化が現れた。トリポリでは、諸部族とのいさかいにフランスとイギリスが介入し、カラマンリー朝は混乱状態にあった。こうした状況の下、1835年5月、オスマン帝国はトリポリに艦隊を派遣し、カラマンリー朝を廃して直接統治を開始する。翌1836年、オスマン帝国はチュニスに艦隊を派遣し、トリポリ地域の制圧のため、オスマン帝国軍への参加をムスタファ・ベイ（在位：1835-37年）に促した。ムスタファ・ベイは、これに応じてトリポリへの派兵を決定する<sup>(11)</sup>。

こうして、チュニジアにとっては、西方のアルジェリアはフランスに、東方のトリポリ地域はオスマン帝国に支配されるという国際環境の劇的な変化に見舞われたのである。

### 3. アフマドを支える宮廷官僚

父ムスタファ・ベイの死去を受け、1837年10月、アフマドはフサイン朝第10代のベイとして即位する。1806年生まれで、即位時は30歳であった。アフマドは、幼少期から教育を受け、アラビア語の読み書きのほか、トルコ語やイタリア語を話すことができたという<sup>(12)</sup>。

従来からフサイン朝の統治は、多くのマムルーク官僚によって支えられていた。アフマド・ベイの統治下でも、自らの教育係でもあったジョージア出身のムスタファ・サヒブ・アル＝タビ (Mustafa Sahib al-Tabi) や10歳年下でギリシア出身のムスタファ・ハズナダル (Mustafa Khaznadar) などのマムルークがその統治を支えた。なお、ムスタファ・ハズナダルはアフマドの妹と結婚するなどアフマドと緊密な関係にあった<sup>(13)</sup>。のちに改革派官僚として活躍するコーカサス出身のハイル・アル＝ディン (Khayr al-Din) もアフマドのマムルークであった<sup>(14)</sup>。

マムルーク官僚に加えて、19世紀初頭以降、徐々に地元のアラブ人有力者も宮廷に加わった<sup>(15)</sup>。中でもアフマドの統治期に重用されたのが、マフムード・ビン・アヤド (Mahmud Bin 'Ayad) である。ビン・アヤド家の一族は、もともとチュニジア南部のジェルバ島の地方首長であったが、ハムダ・ベイ (在位：1782-1814年) の時代から宮廷に出仕し、19世紀に入ると、他のアラブ人名家との競争にも勝ち抜き、要職に就くようになる。マフムード・ビン・アヤドは、アフマドの統治期に財政・金融の責任者となり、最終的にアフマド・ベイの統治と改革に大きな影響をもたらすことになる<sup>(16)</sup>。

アフマド・ベイの宮廷で活躍したアラブ人に、アフマド・イブン・アビ・ディアフ (Ahmad ibn Abi Diyaf) がいる。イブン・アビ・ディアフは1827年に宮廷に入り、秘書官としてベイに仕えた人物であるが、この時代についての貴重な資料となるチュニジア史を残した歴史家としても知られている<sup>(17)</sup>。

このほかでは、キリスト教徒の外国人官僚もベイの統治を支えた。彼らはベイの宮廷で外交・通商問題を担当した。例えば、サルデーニャ人で1795年にチュニスで生まれたジュゼッペ・ラッフォ (Giuseppe Raffo) は、1820年代から1860年までベイの宮廷に仕え、ヨーロッパの領事たちとの調整を行うなど実質的な外務大臣ともいえる大きな役割を果たした<sup>(18)</sup>。

アフマド・ベイの統治や改革は、宮廷内でのこうした多様な人材に支えられていた。ただし、それは近代的な官僚組織ではなく、ベイの父権的な権威の下に置かれた臣下たちであり、そのことがのちに見る通り、アフマド・ベイの統治の弱点にもつながっていく。

### 4. アフマドの即位と対外関係

アフマドが即位した1837年10月10日、チュニジアの西側に隣接するアルジェリア東

部では、フランス軍によるコンスタンティヌ包圍戦が始まっていた。数日後、コンスタンティヌは陥落し、ついにフランス軍によるアルジェリア征服がチュニジアとの境界地域まで達することになった。

この後、フランスはアフマドに対し、アルジェリアとの境界地域の割譲を要求する。アフマドは、オスマン帝国のスルタンの裁可なしに判断することはできない旨回答し、回答を留保する<sup>(19)</sup>。ただし、それは、アフマドがオスマン帝国の庇護下にあることを主張したというよりも、フランスに対する外交交渉の口実としてオスマン帝国の存在を利用したと考えられる。というのも、次に見る通り、アフマドはオスマン帝国による政治的干渉を徹底的に回避しようとするのである。

翌1838年、オスマン帝国艦隊がチュニスに來航する。スルタンの使者はアフマドの即位に信任を与えると同時に、スルタンに対する年貢を要求する。年貢の要求はスルタンとの主従関係の強化を目的としたものであったが、アフマドはこれを拒否し、従来通りに慣例的な贈答のみを行う<sup>(20)</sup>。

1840年5月、オスマン艦隊が再来航する。使者は、未払い分を含む年貢を再要求するとともに、前年11月にアブデュルメジト1世が發布したギュルハネ勅令をアフマドに通知し、チュニジアでの適用を求めた<sup>(21)</sup>。スルタンの名の下に発せられたギュルハネ勅令の適用は、チュニジアにおけるスルタンの政治的権威を認めることを意味していた。

数年前のトリポリにおけるカラマンリー朝の廃位は、オスマン帝国による脅威をアフマドに実感させる出来事であった。アフマドにとっては、オスマン帝国による干渉を避け、チュニジアの独立を守ることが大きな政治的課題となる。スルタンとの関係は政治的な主従関係というよりも、宗教的な権威としての関係にとどめようとするのである<sup>(22)</sup>。

ギュルハネ勅令の履行を求める使者の要求に対し、アフマドは受け入れを拒絶する。アフマドの決断の背景にはフランスの存在があった。チュニジアに対するオスマン帝国の干渉を排し、自国の影響力の拡大を目指すフランスは、外交ルートを通してスルタンにチュニジアの独立を守るように求めていた<sup>(23)</sup>。この時のアフマドの強気の回答の背後には、フランスによる支援が担保されていたのである。

一方、イギリスの立場は異なっていた。イギリスにとっては、フサイン朝チュニジアが過度にフランスに接近することは望ましくなく、かといってオスマン帝国がチュニジアに介入し、結果的にフランスを刺激してチュニジア征服を誘発することも避けようとしていたのである。イギリスにとって最も望ましい状況は、現状維持であった<sup>(24)</sup>。

アフマド・ベイの拒絶に対し、1841年、オスマン帝国はチュニスに艦隊を差し向ける。これに対し、フランスもチュニスに艦隊を派遣する。結局、オスマン艦隊はフランス艦隊に阻まれてチュニス上陸を果たせぬまま、イスタンブールに帰還する<sup>(25)</sup>。以後、チュニジアではさらにフランスの影響力が高まっていく。

## 5. チュニジアとヨーロッパ

チュニジアと西洋諸国の関係は、19世紀初頭を境に大きく変化する。そのひとつの現れが外交儀礼である。

18世紀までのチュニスのベイによる外交は、基本的にベイが諸外国に恩恵を与えるという形で実践された。オスマン帝国のスルタンがヨーロッパ諸国に恩恵的に特権を認めるという形で成立したカピチュレーションと同類である。いわば、父権的立場から外交が行なわれていたのである。

こうした関係性は、謁見の際の外交儀礼に認められる。従来、ヨーロッパ領事などの外交官はベイとの謁見の際にひざまずいてベイの手にキスをすることが求められていた。この儀礼に反発し、ヨーロッパ諸国の中で初めてこの慣習を拒否したのは、1836年に新しく着任したフランス領事であった<sup>(26)</sup>。アメリカの歴史家カール・ブラウンは、この出来事を「象徴的で重要なターニングポイントであった」<sup>(27)</sup>と指摘している。実際、この後、チュニジアでのヨーロッパ領事のふるまいは大きく変化していく。

1843年10月、フランス領事がベイとの謁見のためバルドー宮に馬車で向かう際、アフマドのいところで後のムハンマド・ベイが乗る馬車が前を横切ったことに立腹し、馬車を止めて相手の御者をののしり、殴りつけるという事件が発生する。この間、ムハンマドは黙って平穏を保っていたという。結局、フランス領事はアフマドとの謁見には向かわずにそのまま引き返した<sup>(28)</sup>。

また、同時期、アフマド・ベイがチュニジアでの不作のゆえに穀物の輸出を禁じたところ、サルデーニャ領事が条約違反であると憤慨し、両国の外交関係の断絶と艦隊の派遣を示唆して本国に引き上げた。この問題は、最終的にイギリスの仲介により、ベイがサルデーニャ商人に賠償金を支払う形で解決された<sup>(29)</sup>。

ヨーロッパ領事による尊大な振る舞いは、一種の外交的駆け引きであったとブラウンは指摘する。その際、アルジェでの「扇の一打」事件を想起する必要がある。ヨーロッパ側の誘導にはまってもめ事が起こると、最終的にチュニジアの運命が危うくなるという懸念は、侮辱を受けた際のムハンマドの沈黙にも現れている。

ただし、両者の力関係の変化は、チュニジア側にヨーロッパからの逃避的な対応ではなく、むしろ、ヨーロッパへの積極的な接近という形をもたらしたのが、この時代の特徴であった。アルジェでの出来事はヨーロッパとの力の格差を痛感させ、生き残りのためには西洋式の近代化が不可欠と認識されたのである。

なお、アフマドは、統治の初期から宮殿内にナポレオンの肖像画や有名な戦闘場面の絵画を飾っていたという<sup>(30)</sup>。それは、アフマドの西洋に対するまなざしの一端を示している。

チュニジアにおける西洋化の一例としてしばしば言及されるのが、奴隷制の廃絶である。

すでに1830年条約において海賊行為に伴うヨーロッパ人奴隷の廃絶は宣言されていた



が、チュニジアではアフリカ人奴隷のトルコ方面への中継貿易は行われていた<sup>(31)</sup>。1841年、アフマド・ベイは、イギリス領事による働きかけもあり、奴隷制の廃絶を宣言する。当時はちょうど、オスマン艦隊によるチュニス遠征の危険が差し迫っていた時期であり、アフマドにとっては、イギリスの仲介を期待してイギリス領事の奴隷制廃絶の要求に応じたという側面が指摘されている<sup>(32)</sup>。

アフマドはチュニスの奴隷市場を閉鎖するとともに、国際的な奴隷貿易を禁止する。さらに1846年には、すべての奴隷の解放を命じ、アフマドの意向に沿ってイスラーム学者による布告も発せられた<sup>(33)</sup>。

チュニジアにおいて奴隷の存在は伝統社会に根ざしており、臣下の間でも混乱やためらいが生じたという。そうした反発にもかかわらず、奴隷制廃止を実行しえたのは、イギリスへの配慮に加えて、アフマドの強いイニシアティブによるものであった。ブラウンは、偉大な統治者が弱者に恩恵を与えるというアフマドの父権的性向を指摘している<sup>(34)</sup>。

いずれにせよ、アフマドによる奴隷制の廃絶は、ヨーロッパから大きな称賛を得ることになる。そしてこの後、アフマドのフランス訪問が実施された<sup>(35)</sup>。

1845年6月、フランス王ルイ・フィリップの息子モンパンシエ公がチュニスを訪問する。アフマドはモンパンシエ公を歓待し、それまでベイの親族のみに限られていた栄光勲章を贈ったという。翌年には、もう一人の王子であるジョアンヴィル公もチュニスを訪問する。

1846年9月、アフマドはヨーロッパ訪問を計画し、フランスとイギリス領事にその意向を伝える。アフマドは1カ月以内の出発を要望し、11月5日、チュニス近郊のグーレット港からフランス船ダンテ号に乗り込み、出発する。

11月13日、アフマドはフランス南部のツーロンに上陸する。ツーロンでは造船所や兵器庫、工場などを見学し、15日、パリに向けて旅立つ。馬車での移動を経て、23日、パリに到着したアフマドは、数日間の滞在中、士官学校やヴェルサイユ宮殿などを見学したほか、アンヴァリッドのナポレオンの墓を訪問し、ナポレオン時代の将軍とも面会したという。この時代はまだ、イスラーム圏の君主がヨーロッパを訪問することは異例であったが、アフマドは奴隷制を廃絶した開明的な君主として大歓迎を受けた。数日間パリに滞在したのち、アフマドは帰路につき、12月31日にグーレット港に帰着した。

アフマドのフランス訪問は、フランスとの友好関係の向上を目指すと同時に、チュニジアを独立の政体あるいは独立国家と見なされるようにすることが目的であった。フランス駐在のオスマン帝国大使は、国家元首のようにふるまうアフマドに反発し、面会を拒絶した。なお、アフマド・ベイは、フランス訪問後にイギリスを訪れる予定であったが、イギリスから国王との面会の際にはオスマン帝国大使による仲介を求められたため、急遽イギリス訪問を取りやめている。先に述べた通り、イギリスは、オスマン帝国領チュニジアという現状維持を望んだのに対し、アフマドはスルタンの臣下としてではなく、国家元首として扱われることを望んだのである。

フランスから帰国後、アフマドは西洋的な近代化政策を推し進める。それでは、アフマド・ベイがどのような改革を行ったのか、次に見ていこう。

## 6. アフマド・ベイの改革

### (1) 軍制改革

アフマド・ベイが最も力を入れて取り組んだのが軍制改革である。従来はトルコ系住民やマムルークたちが軍務を担い、常備軍を編成していたが<sup>(36)</sup>、アフマドはニザーミ(Nizami)軍と呼ばれる西洋式新軍隊を拡充した。

ニザーミ軍の創設はアフマドの即位以前にさかのぼる<sup>(37)</sup>。1830年のフランス軍のアルジェ侵攻によって西洋との圧倒的な軍事的格差を思い知らされたフサイン2世・ベイは、1831年1月、西洋式歩兵隊を創設する。名称はオスマン帝国の西洋式軍隊ニザーム・ジェディードからつけられたが、チュニジアのニザーミ軍は、オスマン帝国ではなく、フランスによる支援を受けた。フランス軍から2人の士官が派遣され、約1000人の兵士に半年間の訓練が施された<sup>(38)</sup>。

一方、オスマン帝国に対しても、同年5月、設立の許可を得るために特使を派遣する。特使はスルタンから新部隊創設の許可を得るとともに、ニザーミ軍の制服を与えられ、11月にチュニスに帰任した。以後、ベイの宮殿では西洋風のニザーミ軍の軍服を着用することが一般的となる。

ニザーミ軍は、1835年には1600～1800人規模に拡大する。ニザーミ軍の士官は、従来から軍の構成員であったトルコ系住民とマムルークが務めたが<sup>(39)</sup>、兵士は、解放奴隷のほか、人口調査に基づいて地域ごとに一定割合の住民が徴兵された。ただし、それまで兵役の習慣がなかったアラブ系住民からは反発があり、チュニスでは徴兵の撤回に追い込まれた。以後、徴兵は主に地方で実施された。

即位直前にニザーミ軍の最高指揮官となっていたアフマドは、即位後すぐに軍の増強に着手する。アフマドは、歩兵隊を三つの連隊に拡充するとともに、新たに軽騎兵隊と砲兵隊を創設した。1842年にはさらに三つの歩兵連隊を、1846年には第二砲兵連隊を創設し、1846年の時点で、ニザーミ軍は六つの歩兵連隊1万8000人、二つの砲兵連隊5800人、一つの軽騎馬連隊1000人からなる兵員約2万5700人、士官456人という編成に急拡大した<sup>(40)</sup>。

また、アフマドは、ニザーミ軍の士官の育成のため、1840年3月にバルドー士官学校を創設する。初代校長はオスマン帝国軍の顧問経験を持つサルデーニャ人ルイジ・カルガリスで、1852年まで同職を務めた。その後はフランス軍士官が着任する。士官学校の生徒はトルコ系住民やマムルークの子弟がほとんどであったが、アラブ人名家の子弟が学ぶこともあった。教育内容は、軍事教育のほか、工学や測量学、数学など西洋の科学技術や

フランス語やイタリア語などの外国語の習得が行われた<sup>(41)</sup>。士官学校の教育水準は高度というわけではなかったが、基本的な西洋の知識や精神を学び、のちのチュニジアにおける近代化改革を支える人材を輩出する。1860～70年代に活躍する改革派官僚のハイル・アル＝ディンも同校出身者である。

ニザーミ軍や士官学校を支えるため、外国人軍事顧問の招聘も行われた。軍事顧問はフランスに依頼して士官を定常的に数名派遣してもらったほか、独自に人材を開拓したケースもあったという。先に言及したサルデーニャ人ラッフォなどの仲介を通してフランス本国の退役軍人から適任者を探したケースなどである。フランス軍からの正式な軍事顧問の派遣は数が少なく、常に人材不足の状態であった。また、独自に招聘した軍事顧問は、言語の問題に加えて軍事経験や能力において問題が見られることもあったという<sup>(42)</sup>。



フランス訪問時のアフマド・ベイ

## (2) 工業化

アフマド・ベイによる改革は産業分野にも及んだ。ただし、その対象は経済的合理性から選ばれるというよりも、ベイの嗜好に合わせて軍事部門に重点が置かれた。

アフマドは、即位後まもなく、チュニス近郊に小銃などを製造する武器工場や火薬工場を新設する。工業用機械はヨーロッパから輸入され、技師も招聘された。また、グーレット港の造船所を増設し、のちにオスマン帝国のスルタンに献上する軍船などが建造された<sup>(43)</sup>。

さらに、アフマドのイニシアティブによって、ニザーミ軍の軍服を製造することを目的に縫製工場が建設された。必要な縫製機械はマルセイユから輸入され、1844年に操業を開始する。ヨーロッパ人技術者の援助もあり、当初は順調に製造が行われたが、フランス領事の報告によると、約10年後には、工場の機械の多くが故障し、チュニジア人労働者の熟練度や就労意欲も低く、質量ともに生産水準が大幅に低下していたという<sup>(44)</sup>。

アフマド・ベイによる工業化の失敗の原因は、次の二つのエピソードに象徴的に現れている。

第一は、電信システムをめぐるエピソードである<sup>(45)</sup>。アフマドは、フランス訪問中に電信システムに興味を持ち、チュニジアでの敷設を計画する。1848年10月、フランス人技師の協力によってチュニジア内の三つの宮殿を結ぶ電信システムが完成した。

試験運行として、ムハマディーヤの宮殿に滞在していたアフマドは、これから自分がグーレットに向かう旨送信するが、グーレットで受信した臣下はベイに呼ばれたと誤解してす

ぐさまムハマディーヤに向かう。アフマドは、送信されたメッセージが誤解されたことに機嫌を悪くし、その後、宮殿間の電信システムはほとんど使われることがなかったという。

第二が、造船をめぐるエピソードである<sup>(46)</sup>。グーレットに新設された造船所で、フランス人技師の指導の下、フリゲート艦アハマディーヤ号が建造された。建造中から、船の大きさによって造船所のあるチュニス湖からグーレット港を通して地中海に出られないことが指摘されていたが、アフマドはグーレット港の拡張工事を進めるとして建造を急がせた。1853年1月、アハマディーヤ号は完成するが、グーレット港の拡張工事は行われなかったため、結局、同船はチュニス湖から出ることができず、数年後に解体されたという。

上記二つの事例や先の縫製工場の事例は、アフマドの発意によって実行されたプロジェクトが、長期的な視野を欠いたまま、安直に西洋の機材や技術を導入して見かけだけの西洋化を進めて失敗に至った象徴的な事例といえよう。また、チュニジアの内在的な必要性からではなく、ベイの思い付きや虚栄心によって計画が進められたことも新技術の導入が定着しなかった理由であろう。

こうした構図は、アフマドによる一大プロジェクトであるムハマディーヤの宮殿建設にも現れている。もともとムハマディーヤでは兵舎の建設が進められていたが、アフマドのフランス訪問後、都市計画を拡張し、イタリア人建築家の設計による豪華な西洋風宮殿の計画が加えられた。多額の費用をかけて建設された宮殿は、「チュニジアのヴェルサイユ」とも称されることになる<sup>(47)</sup>。

### (3) 財政金融

増大する宮廷の出費を穴埋めするため、アフマドは租税制度や金融制度の改革を進める。

19世紀初頭までチュニジアにおける税制はあまり発達しておらず、徴収しやすい農民への課税が全体の50~70%を占めていた<sup>(48)</sup>。小麦や大麦などに対する十分の一税(ウシュール)やナツメヤシに対するカヌーンと呼ばれる課税である。

徴税はカイドと呼ばれる地方首長の下で行われ、ベイの後継者が司令官となって毎年行われる地方巡回遠征(マハーラ)の際にベイの宮廷に上納された<sup>(49)</sup>。

アフマド・ベイの時代になると、市場での野菜や果物、家畜への課税が新設された。家畜への課税はそれまで税制の網の外にいた遊牧民への初めての課税であった。また、塩やタバコ、皮革が宮廷の専売制となったほか、オリーブの樹木に対するカヌーンが復活して新たに現金による納税が課されるようになった<sup>(50)</sup>。

アフマドは、それまで緩やかであった徴税を厳格化するため、租税取り立て請負い制度を導入する。ただし、請負人の権利は売買されたため、自己利益拡大に走る請負人はしばしば定められた税率を越えて徴税し、農村は次第に疲弊していく。さらに、ベイの臣下の中には、厳密な官僚機構がないことを利用し、税収を横領して私腹を肥やす人間も現れる。アフマドの最側近として知られたムスタファ・ハズナダルもその一人である<sup>(51)</sup>。

また、この時期には中央と地方の関係にも変化が生じた。従来、地方首長であるカイドの地位は地元のアラブ人名家の子弟が世襲していたが、アフマド・ベイの時代にはベイ側近のマムルークが任命されることが増えていく。特にサヘル地域やジェルバ島など大きな税収が見込まれる地域ではマムルークがカイドを務めるようになった<sup>(52)</sup>。こうして、税制改革や地方との関係の変化によって、ベイの宮廷による地方支配が強化されていく。

アフマド・ベイは、フランスから帰国後の1847年7月、紙幣の発行や硬貨の鋳造を行う公営銀行を設立する<sup>(53)</sup>。紙幣は正貨に兌換可能であったが、商業税代わりに4%の割引がつけられた。公営銀行の責任者には、ベイの側近の一人でジェルバ島出身のマフムード・ビン・アヤドが指名された。

それまで、チュニジアとの貿易で巨額の利益を上げていたヨーロッパ商人からは、4%の割引に対して不満の声が上がったが、公営銀行の設立はチュニジア側が自らの手に経済のコントロールを取り戻そうとする試みでもあった。ただし、ほどなくその試みも、またその他の改革もすべて崩壊する大事件が発生する。

## 7. 改革の挫折

ニザーミ軍の拡充や工業化、外国人顧問・技術者の招聘、宮殿の建設費用などベイの宮廷の財政には大きな負担が生じていた。ついにアフマドの臣下からも懸念の声があがる。公営銀行のビン・アヤドは、差し迫った必要性がないまま拡大し続けるニザーミ軍の縮小をベイに提言したという<sup>(54)</sup>。しかし、アフマドは一貫して軍の削減には応じなかった。

1852年6月、ビン・アヤドは健康上の理由でフランスに渡り、そしてそのままチュニスに戻ることはなかった。それは単なる亡命ではなく、宮廷財産の横領を伴った逃避行であった。チュニスの公営銀行には、兌換のための正貨はまったく残っていなかったという。

ビン・アヤドは亡命の理由を生涯明らかにしなかったが、財政破綻が予想されるなか、ベイの寵愛を失った側近がどのような運命をたどるかを知っていたビン・アヤドは、先手を打って宮廷の財産を持ち逃げしてフランスに亡命した可能性をブラウンは指摘している<sup>(55)</sup>。

いずれにせよ、ビン・アヤドによる財産持ち逃げは、ベイの宮廷の財政に決定的な打撃を与えた。アフマドは横領財産の返還のためにフランスで裁判を起こすが、長年に渡る審議を経ても、結局、返還の判決が下ることはなかった。

1853年1月、アフマドはニザーミ軍のほとんどを解散し、その他の改革も停止した。ビン・アヤド事件の翌月、アフマド・ベイは発作を起こし、半身不随状態となっていた。

その後、アフマドは、オスマン帝国のスルタンの求めに応じてクリミア戦争への参加を決意する。イスラームの連帯というスローガンに魅せられたベイは、解散したニザーミ軍を再編成するため、自らの宝石や財産を供出し、さらに臣下にも協力を呼び掛ける。熱狂

は拡がり、出征のための費用が工面された。兵士たちの士気も高かったという。それは、急速な西洋化に対するある種の反動であったとも考えられる。

1854年7月から8月にかけて、兵士6600人のニザーミ軍が派遣された。さらなる遠征費用を捻出するため、側近のハイル・アル＝ディンがフランスに派遣され、借款の交渉が行われた。最終的にはさらに2000人の兵士が戦地に送られた。

1855年5月、アフマド・ベイは、病気により、息を引きとった。後任のベイには、いとこのムハンマドが即位した。

1856年3月、クリミア戦争が終結する。派遣されたニザーミ軍の約40%の兵士は戻らなかったという。死因の多くが感染症によるものと見られている<sup>(56)</sup>。

## おわりに

アフマド・ベイの統治期は、対外的な圧力の下、チュニジアは存亡の危機にあった。アフマドによる諸改革は、そうした圧力に抗するための試みであったといえよう。

結果として、改革は特に軍事面が優先されることになった。また、西洋との力の格差は明白であったため、改革は西洋化となって現れた。その象徴はニザーミ軍の拡充やバルドー士官学校の創設である。

なお、アフマドの改革は、先行するオスマン帝国やムハンマド・アリーのエジプトの改革からも影響を受けたであろうが、チュニジアはオスマン帝国からの自立を目指していたため、オスマン帝国やエジプトから直接的な指導は受けずにチュニジア独自の改革となった点も特徴のひとつである。

急速な西洋化を進めるにあたり、問題となったのがチュニジア内の体制である。厳密な官僚機構が存在せず、旧来通り、ベイによる父権的な権威に基づいて主なる政策や人事が決定されたため、ずさんで浪費的な開発や官僚による汚職、農村の疲弊などを招くことになった。西洋化を目指し、ヨーロッパから技術や機材を輸入したものの、現地に根付くことがないまま、むしろ財政的な危機を広げ、最終的に改革は挫折するのである。

アフマド・ベイの改革は、惨憺たる結果に終わった。ただし、その改革は副次的な効果を持ち、チュニジアに新たな変化の種をもたらすことになる。次の時代には、バルドー士官学校で西洋的教育をうけた卒業生のなかから改革派官僚が生まれ、また、租税改革や徴兵制度、中央と地方の関係変化などによって「国民意識」が醸成されていくのである。

チュニジアを取り巻く対外的な危機、特にヨーロッパからの圧力は変わることはなかったが、19世紀中葉には、チュニジアの政体そのものを変革するような大改革が試行されることになる。

註

- (1) この時代のチュニジアに対する呼称はさまざまである。最も多いのが、Tunisia(英)、la Tunisie(仏) = 「チュニジア」という言い方であるが、そのほかでは、the regency of Tunis (英)、la régence de Tunis (仏) = 「チュニス摂政領」や Ottoman Tunisia (英)、la Tunisie ottomane (仏) = 「オスマン帝国領チュニジア」、あるいは、the Beylik of Tunis (英)、le beylicat de Tunis (仏) = 「チュニス・ベイ領」などの語も使用される。なお、18 世紀のフランス人地図作家ギヨーム・ドリルの北アフリカ地図では、Royaume de Tunis = 「チュニジア王国」と表記されている。また、当時のヨーロッパの外交史料では、the regency of Tunis、la régence de Tunis という表記が最も多く見受けられる。
- (2) アフマド・ベイの統治期については、いまなお、ブラウンの研究がもっとも包括的で詳細な研究である。L. Carl Brown, *The Tunisia of Ahmad Bey, 1837-1855*, Princeton University Press, 1974. また、エルターフニのシンシナティー大学に提出した博士論文がアフマド・ベイの経済政策について扱っている。Ali Eltarhuni, *Factors that affected the Tunisian industrialization movement in the era of Ahmad Bey (r.1837-1855)*, University of Cincinnati, 2015. チュニジア国内の研究としては、19 世紀のチュニジア史を扱った E. Guellouz, A. Masmoudi et M. Smida, *Histoire de la Tunisie, Les temps modernes*, Société Tunisienne de Diffusion, 1983 や社会経済分析を中心とした Mustapha Kraïem, *La Tunisie Précoloniale 2*, Société Tunisienne de Diffusion, 1973 がある。チュニジアとリビアの近代化の比較を行っている次の研究書もアフマド・ベイの統治期を扱っており、有用である。Lisa Anderson, *The State and Social Transformation in Tunisia and Libya 1830-1980*, Princeton University Press, 1986. アフマド・ベイによる奴隷制廃止については、次の研究書がある。Ismael M. Montana, *The Abolition of Slavery in Ottoman Tunisia*, University Press of Florida, 2013.  
邦語文献では、筆者の知る限り、アフマド・ベイの統治期に関する研究書や論文は見当たらず、マグレブの通史を扱った宮治の著書やチュニジア近現代史を扱った鹿島の著書に言及が見られるのみである。宮治一雄『アフリカ現代史 V 北アフリカ』山川出版社、1978 年。鹿島正裕『民主的アラブ国への道—チュニジア近現代史とブルギバ』第三書館、2021 年。邦訳書では、チュニジア近現代史を扱ったパーキンズの著書に数頁にわたる記述が見られる。Kenneth Perkins, *A History of Modern Tunisia (2nd ed.)*, Cambridge University, 2014 (ケネス・パーキンズ『チュニジア近現代史：民主的アラブ国家への道程』鹿島正裕訳、風行社、2015 年)。
- (3) 16 世紀の北アフリカをめぐるオスマン帝国とスペイン帝国の争いについては、次を参照。桃井治郎『海賊の世界史：古代ギリシアから大航海時代、現代ソマリアまで』中公新書、2017 年、第 3 章。
- (4) 17 世紀及び 18 世紀の北アフリカとヨーロッパの外交関係については、次を参照。桃井治郎『「バルバリア海賊」の廃絶：ウィーン体制の光と影』風媒社、2015 年、第 1 章。
- (5) 19 世紀初頭の北アフリカ海賊の廃絶をめぐる外交交渉については、同上書、第 3 章および第 4 章を参照。
- (6) Brown, *op. cit.*, p.143.
- (7) フランスの将軍クロゼルは、チュニジアのフサイン 2 世・ベイに対し、協力の見返りにアルジェリアの主要都市オランとコンスタンティヌの首長の地位を提示する。その後実際にフサイン朝の代表団が派遣されたが、現地住民の反発によって撤退した。Jamil M. Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, 2nd ed., Cambridge University Press, 1975, pp.185-187.
- (8) Eugène Plantet, *Correspondance des Beys de Tunis et des consuls de France avec la cour 1577-1830*, Félix alcan, 1899.
- (9) Daniel Panzac, *Les corsaires barbaresques: La fin d'une épopée 1800-1820*, CNRS Edition, 1999, p.277.
- (10) アルジェリアの統治者はアルジェのデイであったが、西部地域はオランのベイが、東部地域ではコンスタンティヌのベイが地域的な統治を行っていた。
- (11) Abun-Nasr, *op. cit.*, p.259.
- (12) アフマドの母親は海賊によってチュニスに連行されたサルデーニヤ人であった。Brown, *op. cit.*, pp.209-11.
- (13) ムスタファ・ハズナダル以外も、マムルークがベイの妹や娘など近親者と結婚することは一般的であった。こうした結婚政策を通じて、現地アラブ人有力者とは適度な距離を保ちつつ、従

順なマムルークに支えられたベイに権力が集中し、フサイン朝宮廷内で独自の支配階層が強化されていった。*Ibid.*, pp.30-32.

- (14) *Ibid.*, pp.219-222.
- (15) *Ibid.*, pp.65-66.
- (16) 1837年、フサイン2世・ベイの元マムルークのシャキール・サヒブ・アル＝アビがムスタファ・ベイに対するクーデターを画策するが、それをいち早くアフマドに知らせて阻止したのが、マフムード・ビン・アヤドであった。アフマドがその統治期にビン・アヤドに信頼を置くひとつの理由となった。*Ibid.*, pp.216-217.
- (17) イブン・アビ・ディアフが記したチュニジア史は、アフマド・ベイの統治期も扱っており、ベイ側近という当事者による貴重な史料である。Ahmad ibn Abi Diyaf, *Ithaf Ahl al-zaman bi Akhbar muluk Tunis wa 'Ahd el-Aman* (الأمان وعهد تونس ملوك بأخبار الزمان أهل إتحاف). なお、アフマド・ベイ統治期の巻については英訳・仏訳はないが、ブラウンの研究を含めて先行研究の多くは同史料を用いており、また、部分的な翻訳はいくつかの研究の中に散見される。
- (18) Brown, *op. cit.*, pp.228-229.
- (19) Abun-Nasr, *op. cit.*, pp.259-60.
- (20) François Arnoulet, “Les rapports tuniso-ottomans de 1848 à 1881 d’après les documents diplomatiques”, *Revue de l’Occident musulman et de la Méditerranée*, 47, 1988, pp.143-152.
- (21) *Ibid.*
- (22) アフマド・ベイは、外交文書の公用語をトルコ語からアラビア語に変更するとともに独自の御璽を用いたという。ここにも、オスマン帝国からの独立を目指すアフマドの意向が現れている。Mongi Smida, “La Tunisie Husseirite au XIXe Siècle”, Guellouz, Masmoudi et Smida, *op. cit.*, pp.324-325.
- (23) Arnoulet, *op. cit.*
- (24) Olivier Kahl, “A Letter from Ahamad Bey of Tunis to Queen Victoria of England”, *Journal of Semitic Studies*, XXXI(2), Autumn 1986, pp.187-194.
- (25) Arnoulet, *op. cit.*
- (26) すでにアメリカ合衆国の代表団は、1817年、ベイとの謁見でこの外交慣習を拒絶していた。Brown, *op. cit.*, p.242.
- (27) *Ibid.*, p.242.
- (28) *Ibid.*, pp.242-243.
- (29) *Ibid.*, pp.243-244.
- (30) *Ibid.*, p.316.
- (31) Montana, *op. cit.*, ch.4.
- (32) *Ibid.*, ch.5.
- (33) Brown, *op. cit.*, pp.321-325.
- (34) *Ibid.*, pp.321-322.
- (35) アフマドのフランス訪問の詳細については、次を参照。*Ibid.*, pp.325-334.
- (36) トルコ系住民とマムルークによる常備軍以外には、アルジェリア・カビリー地方出身者からなるズアーブ (Zouaves) 部隊や徴税を兼ねて毎年行われる地方巡回遠征の際のアラブ系遊牧民の参加などがあった。*Ibid.*, ch3.
- (37) チュニジアのニザーミ軍についての詳細は、次を参照。*Ibid.*, ch.8.
- (38) 注6で見た通り、この時期は、アルジェリアのオランやコンスタンティヌの委任をめぐり、チュニジアとフランスは密接な関係にあった。
- (39) ニザーミ軍の設立に関し、士官としてトルコ系住民やマムルークの子弟が登用されたことで、オスマン帝国のように旧軍隊による反乱は生じなかった。
- (40) 1846年10月時点での兵員数。当時のフランス人軍事顧問フォリー中佐による記録に基づく。*Ibid.*, p.269.
- (41) パルドー士官学校の詳細について、次を参照。*Ibid.*, pp.292-295.
- (42) この時期の外国人軍事顧問については、次を参照。*Ibid.*, pp.282-292.
- (43) Eltarhuni, *op. cit.*, pp.72-79.



- (44) *Ibid.*, pp.82-89.
- (45) Brown, *op. cit.*, pp.320-321.
- (46) *Ibid.*, p.302
- (47) *Ibid.*, pp.317-318.
- (48) そのほかには皮革販売への課税や輸出入関税などがあった。*Ibid.*, pp.134-137.
- (49) *Ibid.*, pp.127-133.
- (50) Anderson, *op. cit.*, pp.80-81.
- (51) *Ibid.*, pp.81-82.
- (52) 1863 年には、65 人のカイドのうち約半数がマムルークに置き換わっている。*Ibid.*, p.80.
- (53) Brown, *op. cit.*, pp.343-344.
- (54) *Ibid.*, p.346.
- (55) *Ibid.*, p.347.
- (56) クリミア戦争へのニザーミ軍派遣の経緯と結末については、次を参照。*Ibid.*, pp.303-312.

